【Zoom講座】吉田松陰の言葉を読む　第３回：７月１８日（土）午後

◎（上123頁）

てのことを［孔子］にけり。**らみてからずんば、ともれざらんや。らみてければ、ともかん**。…

**れは、のなり。は、のなり**。れればはげり。にく、**のをし、のをうことかれ**、と。…

くが**のをう**。…

、**をていてすることなければ、ちのにがる。**…

**することかれ**。のくすることかれ。

ののぜざることをえて、をくり。としてる。のにりてく、れぬ。のずるをけり。のりきてをれば、ちれたり。

**ののずるをけざるなし**。てしとしてをつるは、を［耕したり世話をしたりすること］らざるなり。がずるをくるは、をくなり。きのみにずして、をす、と。 （上123頁）

のもかにむべし。

とはののなり。… にならずや。れども**のをわざるは**、にしてもとしてれざるし。やにするをや。やをや。しのいてれをにすれば、のりなし。… はのれるものなり。

とはののなり。「もするわず、もすはず、もするわず」とう、ちのなり。

**「をていてすることし」とはち「のをし、のをうことし」のにして、のをうのなり。**

**「のをす」とうは、がをばんとするのをちめてもがせなくすることなり。**

**のはなり。**はしはむることありてはにすることなし。にものをがせなくするを、のをすとう。…

のはえて、にりする、にてもなること、にをにす。

◎（137頁）

「**のすはくべきも、らるはるべからず**。」

　　（孟子は、この先人の言葉を2回繰り返している。）

「はよりをめざるなし。」（137頁）

の**だ**。…

にのはじにて、ややのをすくうに、にわく、「よりるにず、よりづるにず、よりめざるなし」となり。のをりて、めてににるべし。

のをらざるは、**にのみこびへつらいて、のはめず。ををしてをむるとう**。のう、り。れむべきのみ。

（ここから印字した。）

◎（上 143）「**はのなり、のなり**」

**・はにとす**。［人役は、人から使われること］

をか「」とう。、をし、にてうなければ、一時にせらるるとも、にすべし。にせらるるとも、をるにはせらるべし。をるのはにするにる。よりの、ののすべきならんや。にを「」とう。

をか「」とう。そのる、とども、とども、にるにをてせざれば、びり、ににして、ものをんずることはず。のにじ、**をるとども、らじ、らい、んぜざるのしき**、たとかいわん。

**くもにてることあらば、・、くとしてんじしまざることなし**。**しらざれば、よりしむべくして、しむことをず。、のとなるのみ**。にのはのにずして、はのにず。

**の・は、する、んとすればち**。**の・のめきがきにず。をしみてしくのとなるや。わざるのしきなり**。

◎（下585頁）

「の、の」とうは、のなり。**にう、・、なることなし**。も…はなり。もはなり…。…

・・・・・のきは、**にもなるにて**、ち あるのみ。れり。を以てにえてすることなし。ちのたるなり。

**も々らせば、にらんや。わくはよりとにし**、をぎ、をくにらば、がとどものにざるはなし。

のとして、とえば、かかかにて、とは ［天地の差］のをなせるきとう。、**の**にて、に「に・の にるからず」とはのなり。

◎（上238頁）

・孟子の本文　志士は（溝や谷）にることを忘れず、勇士はその（頭）をうことを忘れず。

・（松陰の文）

　書を読むの要は、こられの語において、反復熟思すべし。…

　志士とは志達ありて節操を守る士なり。節操を守る士は、困窮するはより覚悟の前にて、早晩も飢餓してへ転死することをうてれず。勇士は戦場にて死にするはより望む所なれば、早晩も首を取らるるとも、顧みざることをうてれず。いやしくも士と生れたらん者は、志士・勇士とならずんば、恥ずべきのしき者なり。

　今、わがはい、に陥り、まさに身を終わらんとす。これしく志士の節操を心掛くべし。（溝や谷）をさえ忘れざれば、生をれいご（牢屋）に終わるとて、少しも頓着はあるまじ。かえって本望とする所なり。

　この志、一たび立ちて、人に求むることなく、世に願うことなく、昂然として天地古今をすべし。豈愉快ならずや。

◎（上239頁）

・孟子本文　己をまぐる者は、未だよく人をくする者あらざるなり。

・（松陰の言葉）この語、誠に切実というべし。

◎（上288頁）

・孟子本文　りてこれを己に求む。

　　　　　　家の本は身に在り。

・（松陰の言葉）

　「反求」の二字、聖経賢伝、百千万言の帰着する所なり。「在身」の二字も、また同じ工夫なり。天下の事、大事小事、この道を離れて成ることなし。

◎（上333頁）

・（松陰の言葉）

　人の師とならんことを欲すれば、学ぶ所己が為に非ず。博聞強記、人の顧問に備わるのみ。しこうしてこれ学者の通患なり。わがはいもっとも自ら戒むべし。およそ学をなすの要は、己が為にするにあり。己が為にするは君子の学なり。人の為にするは小人の学なり。しこうして己が為にするの学は、人の師となるを好むに非ずして自ずから人の師となるべし。人の為にするの学が、人の為とならんと欲すれども遂に師となるに足らず。故にいわく、「の学は以て師となるに足らず」と。なり。

　以上、三章、人のにかかわらずして己を修め実を尽くし、言語を容易にせず、実行を以て自ら責任とし、人の師となるを好まずして己の為にするの実学を修むべきをいう。意ならびに相似たり。みな己を修め実を務むるの教えなり。

◎（上457頁）

「ののをずるや、をしてをさしめ、をしてをさしむ。はのなり。にのをてのをさんとするなり。をすにずしてぞや。」

の、**、てをすべし**。**が、にてもするなし。ぞ「の」をてらるべけんや。のららざるもし**。

れどもにあり。るとうも**のみ**。もくのをてらぜば、にてらるあらん。らずして**・をてにらするは、のしきなり**。

◎（下２６５）

・孟子本文

その心を尽くす者は、その性を知るなり。その性を知れば、則ち天を知る。

・（松陰の言葉）

　今人、未だかつて心を尽くさず。故にその一杯の所を知ることわず。…ただ心の一杯を尽くすのみ。…よろしく先ず、一事より、一日より始むべし。…

**を知れば、自己の性分、皆わがものとなるなり**。余、ここにおいて深く感ずることあり。人この性あり。この心あり。しかればこの天、また私が分外の事に非ず。わが一身の抱負また豈盛大ならずや。しかれども尽くさず知らざるに至りては、にて、草木の一類たるを免れず。しかる時は盛大雄偉の抱負、性といい心というもの、**皆持ち腐りになるなり。豈甚だ惜しむべからざらんや**。これを思はば、学問・行事、豈一日として廃怠すべけんや。

◎（下４０５）

「をむ」とは、この「」のとたり。をすは、のをすなり。

をむは、**のをう**ことなり。は・・・・、なり。はをきくるがなり。はをくるがなり。・・、あり。

**このをわざるはのなり。もしこれをわばちなり。**

　しこうしてをむはをすとそのは［別々］のにず。そもそもの、これらのにおいてこれをれば、にくにりあり。

　「**にわる**」のも、・も、も、これにてるべし。

**そのをえば、ちにて、にももなきとは、なるかななるかな。**